

25人で 民話の世界にワーブ!!!

民話を広めるプロジェクト

11月9日(土) 一般公募による、第1回民話めぐりウォーキング広瀬編を実施した。

広瀬神社・松森稲荷・禅龍寺・清水宗徳の墓を巡って広瀬神社へ戻る約3.5Kmのコース。今年3月まで広瀬神社の氏子総代を務めていた斎藤義三(さいとうぎぞう)さんに案内役をお願いし、さわやかな秋の一日、一般応募者とスタッフの25名が、地域の歴史や民話を訪ねて、半日「ワーブ」した。

広瀬神社の社伝によると、3世紀頃、日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征の際この地に立ち寄り、民の平安の守り神として、自分の故郷大和(奈良県)の廣瀬大社から若宇迦能売命(わかうかのみこと)を勧請したと有る。また景色などが廣瀬村に類似している事から、今後この地を「廣瀬の里」と呼ぶが良いと言い残した事、その後上広瀬(かんびろせ)村と下広瀬村の村人達が、社殿の向きをめぐる言い争いをした事などは、伝承民話「ひろせのタケル」で面白く語られる。

広瀬神社境内に祭られる杉森稲荷に対して、入間川沿いに広がる畑の中に祭られる松森稲荷では「スギモリ稲荷とマツモリ稲荷」が広瀬の方言で語られた。「おらほうのお稲荷様の方が数段優れているんだ」というむき出しの競争心が、滑稽なタッチで描かれている。

禅龍寺では、観音堂の前で「観音様と大男」が語られた。鎌倉の尼寺東慶寺から、正月に往復16日掛けて観音様をお連れした大男の話。

清水宗徳の墓前では「入間馬車鉄唱歌」を全員で合唱し、この地の偉人を偲んだ。

未知の不安材料が多かった時代、民衆にとって神や仏は、平安や健康、豊かさや幸をもたらすと信じられていた祈りの対象であり、日常生活に密着したよりどころであった。

客観的な価値観で法武装した現代社会とは違い、人情のままに形作られた村社会に生きた人々は、自分の家やおらが村の都合を、感情のままに堂々と声高に主張する。しかしそれは乾ききった冷徹な現代のいじめや暴力とは異なり、豊かな喜怒哀楽の発露であり、家や村への愛着の現われでもあった。



入間馬車鉄道を創設した清水宗徳の墓前で「入間馬車鉄道唱歌」を全員で歌う



広瀬神社の社伝などを話される斎藤さん(左)



熱心に耳を傾ける皆さん(広瀬神社にて)

参加者は全員、ほかほかと温まった心と、広瀬の地への愛着と、いたずらっ子のような瞳をお土産に半日のワーブを終り、元気に帰宅した。

【アンケートより】

- *新しい発見があり、とても楽しい企画だった。
- *普段何気なく通っている所だったが、とても勉強になった。
- *広瀬神社の歴史の重さ、古さに感動。狭山の事をもっと知りたい。
- *地元に住んでいても知らない事が多かったので歴史や民話が聞けて良かった。
- *とても良い企画だと思った。また参加したい。

文責 横山美衣